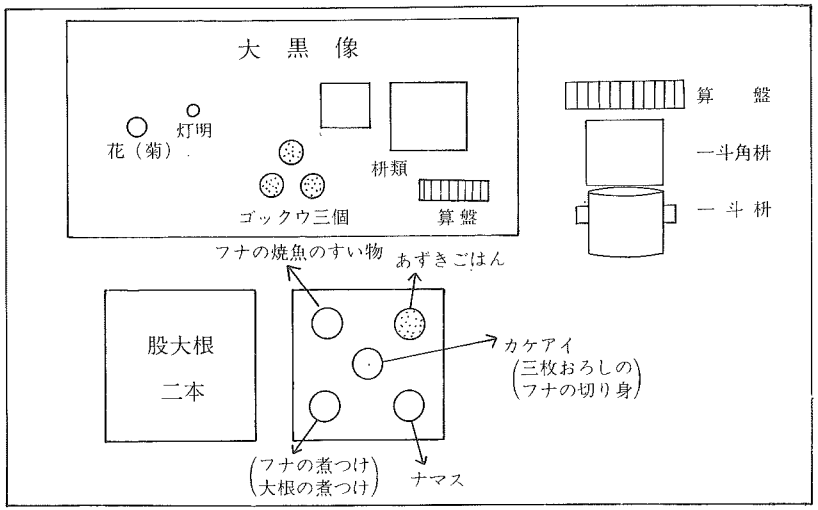


○大黒さんに股大根をあげる。メカジャーのおつけ・煮〆・なます・頭付きの魚を供える。（西古賀）

昭和五十二年十二月に、東古賀の御厨新吾氏に依頼して、昔のとおりに実施していただいたが、その時には上図（前頁の写真）のように配膳されていた。

ここでは、「大黒さんは鮒が好き」・「一年中の算入をする」・「股のある大根がよい」などといわれる。翌日はあずきをつぶしておはぎをし、それを大黒さんに供えるし、股大根は煮付にして、元旦の朝に食べる。「大黒さんは欲が深いので、あずき御飯、おはぎまで食べて行かれる」という。

祭神の大黒天については、大国主命（おおくにぬしのみこと）であるとする説と、印度の神様である大黒天とする説があるが、発音が大国と大黒と同一であるところから混同されたものと考えられるが、いずれにしてもわれわれの祖先のこころをしのぶことができる。大黒天が座している俵は衣食住をあらわし、打ち出の小槌は幸運を打ち出す道具であるとされている。

二　民間信仰

(一)　生活と信仰

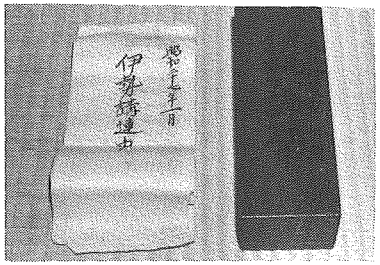
1　講と信仰

宗教上の目的を達成するために、信仰を同じくするものが寄り合って結成している信仰集団を講という。講は寺院・神社または宗派の教祖たちがみずからの教団拡張のために、檀徒・氏子などの信者たちを組織し、その各集団にそれぞれ講という名を付している場合と、寺社・宗派との結合は直接にはないけれども、村落の地域集団単位ごとに成立して、いちじるしく地縁性の濃厚なものとに大別される。浄土真宗における報恩講・日蓮宗の題目講をはじめ、有力な神社の講では伊勢講・権現講などが前者の例としてあげられるし、また後者には月待ち・日待ちなどの民間信仰的な講をはじめ、無尽・頼母子（たのもし）などの経済互助的な講、観音講、茶講などの社交娯楽的な講があげられよう。

(1)　伊勢講

伊勢参宮を目的に結成された講で、伊勢の皇大神宮を崇敬するところから大神宮講ともよばれる。

大神宮碑（佐房）



伊勢講帳（東古賀）

講を構成している人を、講中・講衆・もしくは講仲間といい、お伊勢参りの路銀を積み立て、その共同出資のもとにクジによって代表者を順番に派遣するので、その代表の記念として大神宮碑が各地に建立され

大神宮碑一覧表

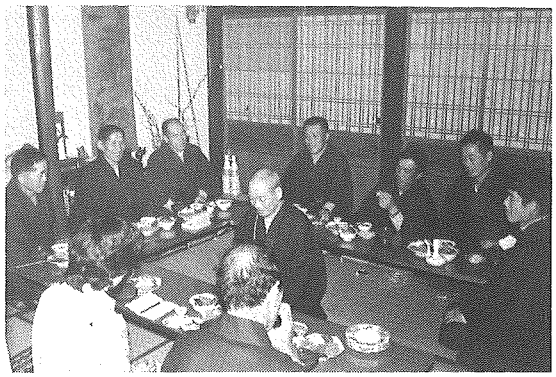
年号	所在地	年号	所在地
寛文　元年（一六六一）	西南里路傍	寛延　三年（一七五〇）	西古賀天満宮
〃　（一六六一）	咾分天満宮	〃　（一七五〇）	鰡江天満神社
寛文　三年（一六六三）	鰡江天満宮	宝暦　九年（一七五九）	道免天満社
寛文　六年（一六六六）	東南里路傍	安永　四年（一七七五）	今古賀天満宮
寛文　七年（一六六七）	咾分天満宮	安永　五年（一七七六）	西古賀天満宮

寛文　七年（一六六七）	広江西八大龍王社	寛政　元年（一七八九）	新村天満社
寛文　九年（一六六九）	野々古賀畑瀬大明神社	寛政　六年（一七九四）	中津厳島神社
寛文十一年（一六七一）	坂井天満宮	寛政　九年（一七九七）	大詫間松枝神社
延宝　三年（一六七五）	早津江志賀神社	寛政十　年（一七九八）	同　右
延宝　五年（一六七七）	鰡江天満宮	寛政十一年（一七九九）	同　右　二基
元禄　二年（一六八九）	同　右	寛政十□年（一七九八～一八〇〇）	重久西入口路傍
元禄　三年（一六九〇）	小々森天満宮	享和　二年（一八〇二）	大詫間松枝神社
〃　（一六九〇）	同　右	享和　三年（一八〇三）	野々古賀畑瀬大明神社
元禄十二年（一六九九）	大詫間松枝神社　三基	文化　二年（一八〇五）	大詫間松枝神社
享保　三年（一七一八）	同　右	文化　五年（一八〇八）	船津天満宮
享保　五年（一七二〇）	中津厳島神社	文化十二年（一八一五）	西南里県道路傍
元文　五年（一七四〇）	佐房大神宮社	文政　元年（一八一八）	坂井天満宮
寛保　元年（一七四一）	西南里公民館前	文久　元年（一八六一）	同　右

ている。

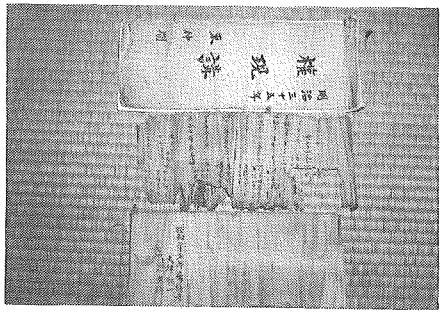
伊勢講は室町時代に畿内を中心に浸透しはじめ、江戸時代に入ると肥前国一円にも発生したとされるが、町内には右表のように、江戸時代中頃以降の造立年号を有する碑が多くみられる。

現在では伊勢神宮参拝の目的はほとんど薄れているが、講仲間で輪番に当番の家を定め飲食するところは多い。



権　現　講（道免東組）

(2) 権　現　講



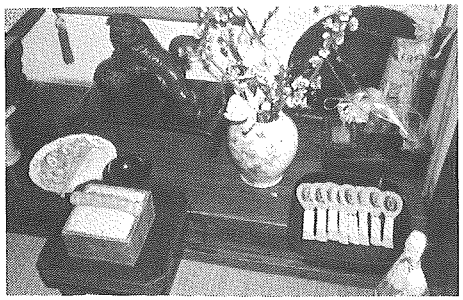
権現講帳簿（道免東組）

肥前の英彦山権現に対する信仰は厚く、江戸時代に鍋島氏が建造寄進したものには、上宮・中宮・下宮の神社をはじめ、銅鳥居などがあって、上宮の拝殿は佐賀の方に向かって立っているともいわれる。このため一般庶民の英彦山参拝の習慣はヒコサンミャーイ（英彦山詣り）として、佐賀平野の各地に根強く残っている。春先の農閑期を利用し講仲間の代表二、三名が、吉井・田主丸・甘木付近と小石原に宿泊し、英彦山では知り合いの坊に泊まり、上宮まで参拝して帰参する。帰りには、お札・飯杓子・英彦山ガラガラ（魔除けの土鈴で門口に下げる）をうけ、さらに上宮裏から熊笹を採ってくる。道免は戸数四十八戸であるが、二組の講仲間が現存し、三月十五日頃にヒコサンミャーイに行く。帰参すると当番の家で寄り合って飲食をし、お札等を配る。英彦山参拝に出発すると、女達は陰膳をして、無事な帰参を祈ったという。上宮裏の熊笹は、農耕馬の腹具合の悪い時やセンツー

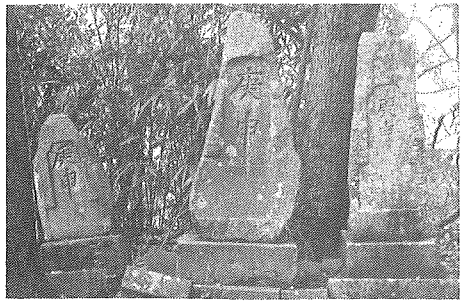
（糞づまり）などの時に食べさせるとよいとされた。英彦山で宿泊する坊のヤンボシ（山法師）さんは、正月頃に川副まで来て、家々を回り、悪魔祓いをしていった。

英彦山には三百程の坊席があったとされ、各坊席では秋の取入れ後にコメホーガ（米奉加）、麦の取入れ後にはムギホーガ（麦奉加）として、各家を訪れて経文を唱えていた。各家では米や麦を差し出していたが、コメホーガは必ずといってよいほどなされていた。

また、都合が悪くて英彦山への参拝が不可能の場合は、佐賀市嘉瀬町徳善院に参詣するともいわれる。



権現講の供物と飯杓子（道免東組）



庚　申　塔（鰡江天満宮）

(3) 庚（こう）申（しん）講

六十年あるいは六十日ごとにめぐりくる庚申の夜には、三尸（し）の虫が睡眠中の身体から脱け出て天に昇り、天帝にその人の罪過を告げるから生命を奪われるという庚申信仰は、もと道教の説であった。したがってこの夜は、庚申講・庚申待などを組織し、夜を徹して語りあい酒食の宴を催す風があった。一般には室町時代に普及し、本県においても江戸時代になると各地に講が結成されたことが、各地

に建立されている庚申塔によってうかがわれるが、江戸時代の庚申講は神道の影響を受けて庚申を猿田彦とし、仏教では腕六本の青面金剛と信仰の対象が分化しているとされている。

町内の庚申講については、その内容は不明であるが、次表のような石塔が残ることから江戸時代中期頃から盛んに催されていることがわかる。

庚申塔一覧

青面金剛刻字塔	延宝　三年（一六七五）	東古賀淀姫社	
	元禄十二年（一六九九）	同　右	
	元禄十六年（一七〇三）	同　右	
	明和　元年（一七六四）	同　右	
庚申刻字塔	延宝　四年（一六七六）	東南里善興寺前	
	元禄　二年（一六八九）	鰯江天満宮	
	享保十二年（一七二七）	同　右	
	明和　元年（一七六四）	同　右	
	安永　八年（一七七六）	同　右	
	文化　十年（一八一三）	同　右	
	安政　三年（一八五六）	吉村北方路傍	
	明治十二年（一八七九）	中津厳島神社	
	天保　十五年（一八四四）	野々古賀畑瀬大明神社 (注)	
	安政　三年（一八五六）	東南里路傍	
	明治二十二年（一八八九）	坂井天満宮	
	明治二十五年（一八九二）	西古賀天満宮	
	明治　三十年（一八九七）	早津江堤防路傍	

(注)「甲田彦大神」と刻字する。
※その他にも年号不明のものがある。

猿田彦刻字塔（早津江）

(4) 八天講

塩田町の唐泉山八天社を信仰する講集団である。八天社は火の神・火伏せの神として厚く信仰され、護符等をうけて荒神に供えたり荒神柱に張りつける家は多い。

また、唐泉山の姿が独特な富士山型をなすため古くから海上交通の目印となり、有明海沿岸漁家や半農半漁民にとって海上守護神とみられたようである。このような八天信仰は一部では講を成立させ、船津・広江・早津江など有明海に面する漁村などを中心に八天講が結成されたり、八天社などの石祠がまつられたりしている。

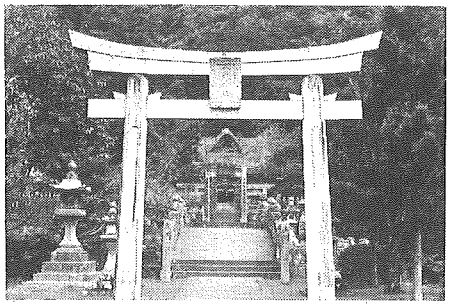
農村部には正月二日に八天さん詣りがあるし、漁村では正月二十三日に八天さん詣りをする。

また、八天さん詣りは「お粥さん」によって赤味があり火事の発生が多いと占われると直ちに催された。八天社からは、コメホーガ（米奉加）としてジャーサン（神官）が各地区の世話人の家を回り、米をもらい歩いた。八天さん詣りをする者の間では世話人を定めておき、各人はその人に米を持参したという。

(5) 日待ち・月待ち講

近隣で仲間を作り、ある特定の日に一夜を眠らないで籠り明かすことで、町内では「お日待ち」として、十月十四日夜半から翌十五日にかけて催されている。一般には伊勢講仲間で行うことが多く、夜を徹して、翌早朝の日の出を拝む。

また、月待ちは特定の月齢の夜に講員が寄り合って飲食を共にし、月の出を待つ行事であるが、一般には「三



八天神社（塩田町）

八天神社護符（大詫間下ノ小路）

夜待ち」などで知られる。

いずれも「神のおそばにいる」ということ、すなわち神のそばにいてともに夜を明かすことであったが、後にはそれが日や月の出を「待つ」ことだと考えられるようになったといわれている。

町内には二十三夜と刻字された石塔が残り、村中安全を祈念するなど二十三夜講が信仰的な講集団であったことがうかがわれるが、現在ではその意味もしだいに忘れられつつあり、単に娯楽的な集団として仲間の情報交換や飲食の機会として催されている。

二十三夜石塔一覧表

年号	所在地
天保　□年（一八三〇～一八四三）	西南里県道路傍
嘉永　六年（一八五三）	野々古賀畑瀬大明神社
嘉永　七年（一八五四）	東南里天満宮
文久　元年（一八六一）	坂井天満宮
明治十九年（一八八六）	東南里天満宮
明治三十二年（一八九九）	野々古賀畑瀬大明神社

(6) 観音講

観世音菩薩は、身を三十三に変化して衆生を済度される慈悲の仏とされ、一般庶民の期待に応えるものとして尊ばれ、西船津では今も定期的に路傍の観音像を祀る。

男子の伊勢講に対し、女性特に娘達の講集団として、町内各地に観音講が組織されていた。それはいずれも信仰集団としての講の性格よりも、むしろ社交娯楽的な講集団としての性格を有して、本来の姿を失いつつある。

毎月十七日に輪番で当番を決めて、その者の家に集まり米二合もしくは二合半をぬき集め、精進料理で親睦を深めた。従って、特別な儀式、道具などはほとんど伴っていないようである。

二十三夜塔（西南里県道路傍）

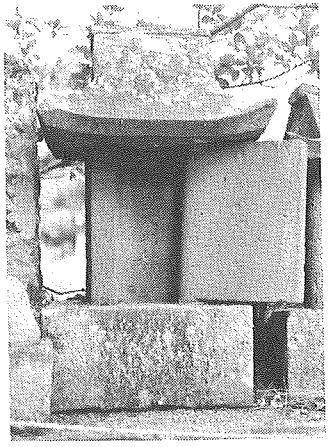
なかでも正月の観音講はにぎわい、米をぬき集める量も多かったり、餅をもち寄ったりした。

昔の観音講は、有力な男女交際のきっかけの場であったようである。古老によれば、観音講の様子を物陰からうかがったとも、あるいは、その席に酒など持参して遊びに行ったともいわれることからうかがわれる。

二月の初午には、観音講仲間の女性達は「この川流し」に精を出した。「この川流し」の時には、自分の髪を白紙や藁苞（つと）に包み、唱え言をしながら川に流し、髪が長く美しくなることを祈ったという。

2 御髪信仰

御髪神は一般にオンガンサンなどとよばれ、その信仰は有明海沿岸に広く分布している。なかでも、有明海の



御髪大明神石祠
（志賀神社境内）

オンガンサン（大詫間）

竹崎沖合に浮かぶ岩礁には御髪社が奉祠され、毎年旧暦六月十九日には沖ノ島詣りの漁船が繰り込む。この沖ノ島には現在灯台が立てられ、海上交通の要となっているが、ここは古くから有明海を航行する船舶の目標となっていたようで、この御髪社は海上安全の守護神ともいわれる。

また、有明海沿岸には、お島という女性の伝説も多い。昔、大旱魃の折に難渋する農民をみたお島は、雨乞い祈願のため、その身を有明海に投じた。その死体は沖ノ島に流れ着き、願いもかなって慈雨をもたらしたというものである。こうしたことから沖ノ島は古くから神聖な島であると考えられていたことがわかる。沖ノ島詣りに参加する地区は、漁村部のみにとどまらず、江北町などの内陸部の農村部にもあり、単に海神のみならず豊作祈願や雨乞い祈願の水神として信仰されている。

早津江志賀神社境内にも御髪大明神の石祠があるが、大詫間にはオンガンサンとよばれる神屋敷があった。大詫間オンガンサンの由来によると、それまでの打ち続く高潮に苦しんだ島民は堤防を築き、寛政五年、本土居に沖ノ島大明神を勧請し海辺

鎮護の守り神としたのに始まるという。その後も本土居は潮止めの役割を果たし、明治七年七月の戌年潮（死者十数名）、大正三年八月大潮などでも大詫間島は難を免れることができた。明治二十六年頃の大旱魃には、このオンガンサンに雨乞い祈願のための浮立を奉納し御利益を享受したという。御神体は明治四十三年松枝神社に移され、この神屋敷は昭和四十七年圃場整備事業に伴い、撤去された。

(二) 民間療法

健康であるということは人間生活の基本条件である。ことに苦汁的な農作業や、その他の生産活動を繰り返している一般民衆にとっては、健康を保持することが何よりも大切であるから、経験によって、いろいろな方法を教えられてきた。まず「早寝・早起き」はだれもが実行せねばならない原則であり、つぎには「腹八分目」が、守らなければならない節度であった。

「手を洗え」とか「歯をみがけ」とかいうような消極的な考え方よりも「かたいものを噛め」とか「厚着をするな」とかいうようにむしろ積極的な態度が重んじられる傾向があった。はげしい労働に耐えるだけの健康を保持するため、かなりきびしい鍛練が必要とされていたのである。いたずらに保護するということは、かえって不老長寿の逆コースであるという、一種の信仰のようなものに支配されていた。

もともと人間は神から寿命を授けられたものと信じられていたので、神の加護とか助けにすがっていくのが当然であった。したがって、正しい信仰が最も正しい養生の方法であった。つまり、神意を知り、神意に従うこと

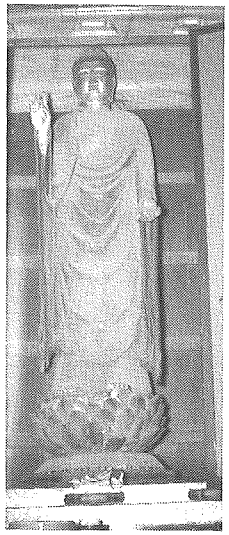
が最上の養生法であったから、占いとか呪いとかが重んじられることもあった。養生というのは現代いわれる保健衛生にほかならないが、本質的には一種の精神修養に属するもので、それは人間が生まれながらにして与えられている自療力を、精神的に奮い立たせる作用でもあった。この自療力が不幸にして尽きたとき、はじめて医療の力を借りなければならなかった。それは薬餌療法・湯治療法・灸鍼療法などであり、しかもその多くは古く中国から伝来したものである。

1 病気と神佛

(1) 川副七佛

医薬の佛として薬師如来が知られるが、川副七佛について『肥前古跡縁起』（寛文乙巳年・大木惣右衛門著）には次のように記されている。

川副庄、一本七佛薬師如来は行基菩薩の御作、聖武天皇の勅願也、楠一本を以て尊形七佛を作り給ふ。依て参詣の輩は元木より参初めて木の未にて詣で納む。柳川副七佛一番の堂場は徳富村の東光寺、二番には寺井の長福寺、三番には崎ヶ江の法願寺、四番には米納津東光寺、五番には南里正定寺、六番には新郷本願寺、七番には袋村の寒若寺の薬師堂にて参納む、貴賤道俗せきあへす衆生悉除の本願に頼



木造薬師如来立像
（法源寺）

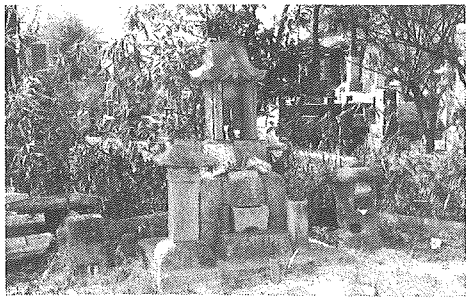
を掛て一筋に祈る、験の類無き霊佛にてぞ在しける…以下略

諸病平癒祈願のため法願寺（現「法源寺」）では、戦前まで正月頃に長さ三間ほどの大数珠を回していた。これは大数珠を中心として中に僧侶が入り鐘を鳴らし、「カンカンタンポ」の唱え言に合わせて数珠を順送りしながら祈願する行事であった。

また正定寺の土用丑の日の頭痛焼きも、頭痛を病む人にはよいとされる。

(2) その他の神佛

西南里地蔵



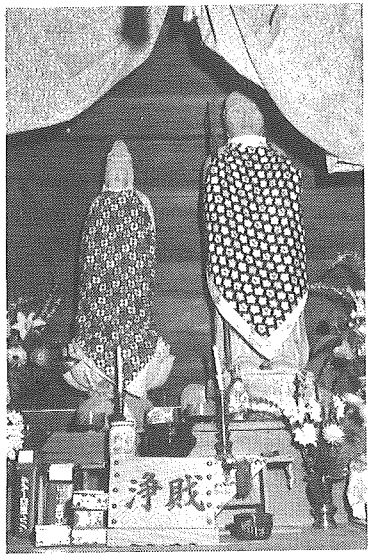
妙見さん（上早）

(ア)眼病平癒　上早・執持院の側の妙見様の石祠に参るとよいとされる。ここに毎朝お水を供えて拝み、その水で目を洗うとよいという。

また、西古賀・西福寺境内の石地蔵には、白紙にメメメ……と書いて祈願するとよいという。西南里には、石地蔵の目のふちをこすり、その手で自分の目をこするとよいとする地蔵がある。

その他にも、大川の生目八幡などの目薬をいただいてさすとよいともされる。

毘沙門様（崎ヶ江）



イボ天神（和崎）

(イ)**イボ地蔵**　和崎のイボ天神様に大豆を自分の年の数だけ煎ってあげるとよいとされる。ここは周辺地区よりむしろ、町外からの参拝者が多いという。

他には、大豆を煎って供え、それを食べると治る（新村・天神社イボ地蔵）、煎った豆を、年の数だけ人の知らぬようにあげて参る（大詫間下ノ小路・イボ地蔵）、などの地蔵があり、久町・鰡江天満宮などにもある。

(ウ)**夜泣き防止**　「雄鶏を描いて、それを逆さにはっておくと夜泣きがやむ」「筬を枕の下に敷くと止る」などといわれるが、崎ヶ江の毘沙門様に子供を伴って参り、お茶とお菓子をあげて願をかけるとよいともされる。お茶は子供に飲ませ、お菓子は近所の子供達に分けて食べさせると夜泣きが治るという。

(エ)**ほおばれ**　大蔵院（西古賀）、正傳寺（大詫間）などに呪いを頼んで平癒を祈願したり、弁財天の護符や膏薬をうけてきて、頬にはるとよいとされる。弁財天は氏神・海童神社や佐賀市嘉瀬町荻野の弁財天や佐賀市八戸町の弁財天などにも参ったという。

2　医療と俗信

(1)　ほおばれ

。梅の肉に麦粉を練り合わせて付けると熱をとる。
。梅干しとごはん粒を練ってはりつける。
。馬のタゴボシをかぶればよくなる。
。うどん粉を酢で練り、紙にのばして患部にはりつける。
。オオバコの粉・卵の白味・メリケン粉を練って付ける。
。オオバコ・タケジョをもんで付ける。
。スリ鉢に盃一杯の酒を入れ、スリコギでまぜてスリ鉢から飲むとよい。
。頬に墨を塗るとよい。

(2)　眼病

。ウナギの骨を煎じて飲む。
。白南天の根と卵の白味を練り合わせて布にはり、それを瞼にはる。
。突き目には、ミョウガの根の汁をさす。
。突き目には、梨のしぼり汁をさす。
。突き目には、ショウガの根と茎の間のところをおろした汁に、紅を少し入れたものをさす。
。トラホームは、目を返して雨ガエルの腹でさするとよい。
。はやり目には、一厘銭に目ヤニを付けて捨てる。誰か拾えば治るという。
。はやり目には、ミゾ貝の汁をさすとよい。
。母乳をさすとよい。
。マムシの目玉を酒にうかしてのむとよくなる。
。目ガサは、藁スボでこすってそれを焼くとよい。
目ガサは、スボを三角形にして患部に当て、それを焼くとよい。
。目ガサには、ニラの白い茎の部分の汁を付けたらよい。
。目ガサの時には、背中に吹出物ができるので、それに一

厘銭を当てて焼けばポチッと音がして良くなる。
。目を患う者は、絹でふいて捨て、それを人が拾うと治る。
。目から耳へかけてこするか、耳下から針で血を出す。
。モグラの黒焼を酒で飲むと、よく見えるようになる。
。ヤツメウナギを食べるとよい。
。ヤニ目は、川菖蒲を煎じて目を洗うとよい。
。「ヤン目（やり目）山サイ行け、ウチンニキ来るな」と唱え、手近かな梅シソやホーサン等で目を洗う。
。老齢のカスミ目には、梅干を漬けたシソをよく洗ってから目を洗う。

(3) メボ・インノクソ

。インノクソの出来た目だけで井戸の中をのぞき「治ったら両方の目でのぞきます」と井戸の神様にいう。
。インノクソ・インノクソと唱えてスボで突くとよい。
。女の髪の毛で涙線を突くとよい。
。女は腰巻の下の端の糸で結ぶとよい。男はヘコの端っこの糸で結ぶとよい。
。カマドのスサで突くとよい。
。カメに水を入れ、フルイを半分みせ「目にインノクソが出来たから治してください」とお願いする。
。ゴボウの種をのむ。
。自分の息をふきかけるとよい。
。ツゲの櫛をタタミにこすり、患部にあててこするとよい。
。土クドのスサで軽く突いて「ナイワズさん、ナイワズさんこんな狭い所にいるより、いい所に出なさい」と唱える。
。土カマドのワラを取り、お経を唱えてスボワラを火にくべて音がしたら治る。
。トウゴマと彼岸花をすりつぶしてつける。
。「東山コウズが岳に立つ　カズラ根を切って葉を枯らす　葉を切って根を枯らす　アビラ　ウンケン　ソワカ」と三度唱えて口で吹くとよい。
。「目イボと思ったら豆だった」といい、白紙でふき、川に捨てる。
。涙線を髪の毛で突くとよい。
。ワラスボを巻きつける。

(4) 耳

。イカに入っているギシギシをけずり、その粉を耳の中に入れるとよい。
。イカのギシギシをけずり、その粉を水にとかし、その上水を耳におとすとよい。
。ドクダミの葉を南瓜の葉に包み、これを火で温めて耳の中に入れるとよい。
。ドクダミをもみほぐして耳に入れる。
。蟬の抜けがらをやいてつけるとよい。粉にしてさすとよい。
。ナスのミソ漬もしくはしぼり汁を耳の中にいれる。
。蛇の抜けがらを耳たぶに巻いておくと中耳炎によい。
。耳痛・耳だれに効くとされる葉汁をさす。（キリン草・ナンテンの葉・大根・ツワブキの葉・雪の下・彼岸花の根・ナスの汁）

(5) 切り傷

。アロエの汁をつけるとよい。
。「医者知らず」という薬草の汁をつけるとよい。
。切り傷や少しの傷には、自分の小便をかけるとよい。
。「ケガイラズ」の花を油につけたのをつけるとよい。
。白ホウセンカの花びらを種油につけておき、それをつけるとよい。
。新聞紙を焼いて黒灰をつけると血止めになる。
。どんな草でもよいから三種類つみ、よくもみ合わせそのままつけるとよい。
。ムカゼを種油につけ、それをつける。古いのがよいという。

。ヨモギの葉汁、またはきざみタバコで血止めをする。
。綿などを焼いて、その灰を種油と練り合わせると血止めになる。

(6) アカギレ

。カタコウヤクをやきこむ。もしくはノベゴウヤクをはる。
。キセルのやにをつける。
。キリン草をもみ、その汁をつける。
。ゴイ（カラスウリ）の実の汁をつける。
。ツケ木（木を薄く切って硫黄をつけ、薪の火起こしにする）に種油をのせ、その油が煮たったらアカギレに入れる。
。ツユクサの花をもんでつける。
。飯粒をすりつぶしてアカギレにはさむ。
。飯粒と茶の葉を練り合わせてつける。

(7) 頭痛

。コメカミにつけるとよいもの。
梅干・梅干と飯粒の練ったもの・梅干とメリケン粉の練ったもの・大根おろし・シソの葉・ハッカ水
。煎じてのむとよいもの。
カキの葉・赤ジソの葉・橙・ヨモギ・ビワの葉・松の芯
。菖蒲の葉を頭に巻くとよい。
。眉の上のむこうづちを手で何回もねずむとよい。

(8) 腹痛

。胃が痛むときは、コンニャクで温める。
。胃痛には、オオバコの汁をのむ。
。胃には、トベラ草を煎じてのむ。
。梅酒・梅肉エキスをのむ。
。梅干の実をつぶしてドロドロにしてのむ。

。下痢止めによいもの。
梅焼酎・マムシの焼酎漬・ニラのミソ汁を二度食べる。
。塩を舌の下に少しつける。
。煎じてのむとよいもの。
センフリ・ゲンノショウコ・ヨモギ
。ニラ入り粥（かゆ）を食べるとよい。
。フツをよく洗い、もんでその汁をのむ。
。ヘソにタバコのヤニをつけると治る。
。ヘソにツバ（唾液）をつけておく。
。胸やけのする時には、柳をかじり青い苦い汁をすうと治る。

(9) 腰から下の病気

。朝露を踏めば脚気が治る。
。ウエの便所からシタの便所をよく掃除し、きれいにしておけば治る。
。オオバコ、ヨモギを陰干しにして煎じてのむ。
。かねがね醤油を一滴もむだにせぬと、女は婦人病をしないという。
。カシの葉を煎じてたでる。
。ドクダミ草を煎じてのむとよい。
。溝に汚物がつまると腰から下の病気になる。

3 動植物と療法

。青梅
すって天日に干すと胃によい。
。青シソ
砂糖もみをして漬け、それに焼酎を少し加えてのむと手足の痛み、しびれ、咳によい。
。イシャイラズ（にわとこ）
ヤケド、アナマタクサレ、ヒスによい。
。イチヂク
汁を患部につけるとヂの薬になる。
。ウリ

鳥栖千寿院でのウリ法事の時、ウリに年齢と名前を書いて、土用の丑の日の夜、川に流すと大難・病気をのがれる。

。梅干
炭火で黒く焼いて、熱湯をかけてのむと風邪によい。

。オオバコ・オバケタケジョ
根をすりつぶしてタマゴと練り合わせてはると、打ち身・ネンザの薬となる。
日陰干しにし煎じてのむとゼンソクの薬。

。カタツムリ
捕って二、三ヵ月するとフンが出なくなる。その身を洗い砂糖をかけて一日三回のむと、気管支炎・小児ゼンソクの薬になる。

。柿の葉
煎じてのむと血圧によい。
古い葉を火にあぶり、手足の痛いところにはるとよい。

。カラスウリ
肌荒によい。

。カヤツリソウ
日陰干しして煎じて使うと胃潰瘍の薬。

。キササゲ
実を煎じてのむと腎臓の薬になる。

。キキョウ
根を日干しにしてのむと咳止めになる。

。キュウリ
キュウリのワタをくさらしてつけるとやけどによい。

。キンカン
実を煎じてのむと咳によい。

。ウリの葉
ジンマシンによいという。

。クコ
根、茎、実とも酒か水で煎じ、お茶代わりに服用すれば神経痛・肝臓・糖尿病によい。

。ゲス（からたち）

実を煎じてのむと腎臓等小便の出をよくする。

。ゴイ（からすうり）
実をすりつぶし、その汁とタマゴの黄味、酢をまぜてのむとゼンソクの薬。

。ゴヨウの松
葉を煎じ出してのむと頭痛によい。

。ザクロ
実、皮、幹を煎じてのむと虫下しになる。

。水仙
根をすってつけるとヤケド・打ち身・ほおばれによい。

。ミイバンカツラ
風呂に入れるとアセモの薬になる。

。シジミ貝
黄だんの薬。
黄だんの時はシジミ風呂に入るとよい。

。シソ
焼酎漬けして咳止めにする。
陰干しして煎じて、患部を洗えばヂによい。

。シノハ（ぎしぎし）
根をすって酢と練りあわせると銭タムシによい。
根と酢と家のススを練ってつけるとタムシの薬。

。シロツバメ（ほうせんか）
白色の花を油につけて吸出しに使う。

。白南天
根、実、葉、マムシの乾燥したものと煎じてのめば腎臓病によい。
煎じてのめば咳止め、扁桃腺によい。
葉を食べると泥酔によい。

。ジャガイモ
すって患部につけるとコブがなおる。
ショウガとすり混ぜ患部にはると肝臓のはれ・腹膜炎・関節のはれ等によい。
蜂にさされた時は、二ツに切り、切口でこするとよい。

。ショウガ

少し枯れた葉を煎じて、患部を洗えばシモヤケによい。

。ソテツ

実を乾燥し煎じてのめば小便つまりによい。

サビ釘を踏んだ時、薬を土鍋で煎じて湿布する。またはお茶代わりに飲むと化膿しない。

葉を黒焼きにしてのむとヂの薬になる。

。セリ

レンゲ草の種などと煎じてのめば心臓によい。

干して煎じて化膿止めに使う。

。センダン

皮を煎じてのむと虫下しになる。

実の黒焼きの半分をつけるとしもやけによい。

。タマゴ

卵黄を強火にかけて混ぜると黒くなって油が出てしまう。これは心臓によい。

卵の黄味に酢を二、三滴入れてのむと扁桃腺の薬。

ヤケド・痔疾の時に湿布するとよい。

。ダラ

木を削って煎じてのめばアセモ・カブレによい。

。タンポポ

根をすって患部にぬると水虫によい。

葉をかむと胃の薬になる。

。チリン草（ゆきのした）

もんでつけると吸出しになる。

。ツワ

火にあぶりヨウの上にはるとよい。

。ドクダミ

陰干しし煎じてのめば毒消し、下剤・胃腸の薬になる。

汁は蓄膿症によい。

煎じてのめばカサができない。

。トウキビ

毛を煎じてのめばボウコウの薬となる。

。トウガ

皮を煎じてのめばハレモノの薬。

。トベラ草

陰干しし煎じてのめばアセモ・毒下しになる。

。トッテコッコウ（つゆくさ）

日陰干ししてのめばボウコウの薬となる。

。ドジョウ

皮をつけるとヒエバレが治る。

。ナツウメ（夏梅）

良く乾かし煎じてのむと強壮剤・解熱剤・女のヒステリーの薬となる。

。ナシ

汁は熱が下がる。ハシカの時によい。

。ナンテン

南天の葉は乗物酔い、二日酔いによい。

南天と焼きフナを煎じてのむとジフテリアの薬になる。

。ニンニク

ワサビオロシですって、痛い所にモグサで焼くとよい。

卵と練り合わせると栄養剤になる。

。ネコヤナギ

葉と枝を一緒に煎じてのむと胆石によい。

。ノラッキョー

ワサビオロシでおろして、それを熱い湯にふかし、砂糖を入れてのむと高熱が下がる。

。ヒガンバナ

根を煎じてのめば肋膜炎の薬。

根をすって足の裏にはると腹膜炎・肋膜炎によい。

ねんざの時に、卵の白味と合わせて布につけてはるとよい。

。ヒシ（菱）

実を日に乾かし煎じて使うと胃ガン・胃腸の薬になる。

。ヒトツバ

実を煎じてのむと熱が下がるという。

実をうすく切って氷砂糖と煎じてのむと咳止め。

。ヒワ

葉を煎じてのむと血圧の薬になる。

実を瓶に入れて、出た汁をぬるとヤケドによい。
。ヒヨコグサ（はこべ）
煎じてのむと腎臓・ボウコウの薬。
ミソ汁にすると乳腺をよくする。
。フツ
陰干しして煎じてのめば神経痛・万病の薬になる。
長く煮つめると血圧・胃ガンの薬になる。
しぼり汁をのめば熱が下がる。
煎じてのめば熱が下がる。
干してもんで、ミソ灸のモグサに使う。
。フキ
根を煎じてのめば毒気下しになる。
。フナ
皮をむいて足の裏にはると熱が下がる。
。ホウズキ
実を煎じてのむと扁桃腺の薬になる。
。松
葉を煎じてのめば心臓の薬になる。
女松の葉を一升瓶に一杯にし、一ヵ月おいてのむと血圧の薬になる。
。ミカン
皮を煎じてのめば風邪引きの薬。
。ミツバ
塩もみして汁をつけるとカユミ止めによい。
。モモ
桃の葉を煎じて汁をつけるとアセモによい。
桃の葉を煎じたぬるま湯で、子供のできものが治る。
。モチ（餅）
すい味のある古餅をミソだきにして食べると胃の薬になる。
。ヤナギ
急に腹が痛む時には、柳の皮をかむと一時止まる。
。ヤツデ
葉を煎じてたでるとヂの薬になる。

三　衣・食・住

(一)　衣　生　活

衣服の原料は、戦前頃までは普段着は木綿、晴れ着にモスが上等とされ、絹は少なかった。特に木綿を織る棉は、新しい干拓地には潮止めすると田を作る前に必ず棉を植えた。棉は多少の塩分があっても影響のない作物なので、盛んに作られた。わたの実をとり糸になして機織り機で織っていた。またカセ（枠）を購入し、その糸を織った。こうした木綿の糸つむぎの場所として各小路毎に娘達が集まる所があった。機織りは明治末頃までは糸を腰にまわして張り、両足の動きに

色染めの方法

藍染め	もっぱら木綿の普段着や作業着、蒲団など一般的に使用する衣料を染める場合で、阿波の「スクモ」という本藍を買って染めたり、クーヤに衣頼した。
木皮染め	雑木の樹皮をソーダ等を入れて焚き、その汁で染める。金茶色・黄色に染まる。
桐染め	桐の木を焼いてその灰汁を染料とする。
ナス殻染め	ナスの葉や茎殻を焼いた灰汁で染める。灰黒色に染まる。
棉殻染め	棉殻を焼いてその灰汁を染料とする。
紺ぼろ抜き染め	本藍で染めた布地をソーダを入れて焚き、本藍を抜きとって染料として再利用する。
ショエン染め	カマドのススをとって、灰汁にしたもの。